

豆腐町遺跡は、JR姫路駅構内に所在します。遺跡の範囲は東西約500m、南北約100mです。遺構の集中する箇所は、大きく飾磨街道沿いの西側地区とかつてプラットホームなどのあった東側地区とに分れます。これまでの調査によって奈良時代中頃から後半にかけての遺構、遺物が見つっています。

7次にあたる今回の調査は東側地区で行い、道路、掘立柱建物跡、溝、井戸、土坑などが見つかりました。道路は両側に側溝を有し、路面幅は最大で5.9mを測ります。道路の北側からは建物跡が現時点で8棟確認でき、いずれも側柱建物で内1棟には庇がついています。溝は幅約3mあり、調査区の北端から道路まで一直線に掘られ、道路の南側からは大きく東側へ曲がっています。道路と溝が交差する地点には、杭が確認でき橋が架かっていたと推測されます。このことから、道路と溝は同時期に機能していたといえます。

下の写真は昨年度に行った6次調査の空中写真です。写真左側の並行する2本の溝が道路側溝で、今回の調査区に続きます。道路をはさんで北側と南側に建物跡が8棟見つかっています。南側の建物跡は、道路に面して建ち並んでおり、側柱建物と倉庫と考えられる総柱建物が認められます。東側地区における2か年にわたる調査で見つかった道路と建物跡は、いずれも遺跡の周辺で認められる飾磨郡における条里地割の方向とは異なる正東西方向に計画的に建てられていることがわかってきました。

こうした遺構からは、竈や鍋といった煮炊具、皿や杯といった食膳具のほか、墨書土器や転用硯、製塩土器が出土しています。また、漆工に関係する漆附着土器（パレット、貯蔵・運搬容器）や鍛冶に関係する鑊の羽口、砥石、織物に関連する遺物である、紡錘車も見つかっています。これらの遺物から遺跡は様々なものを生産する工房であったと推測できます。また、地方では出土例の少ない奈良三彩も見つかっています。

遺跡の存続した時期は、各国で国府や国分寺などが整備された期間と重なります。豆腐町遺跡の北約800mには播磨国府推定地である本町遺跡があることから、豆腐町遺跡もこうした大きな動きの中で形成された可能性があります。今後、遺跡の詳細な検討を行い、実態に迫っていきたいと考えます。



奈良三彩



漆附着土器



2009年度（6次）調査区空中写真（上が北）





①から見た調査区（掘りくぼんだ色の暗い所が柱の跡です）



見つかった掘立柱建物跡



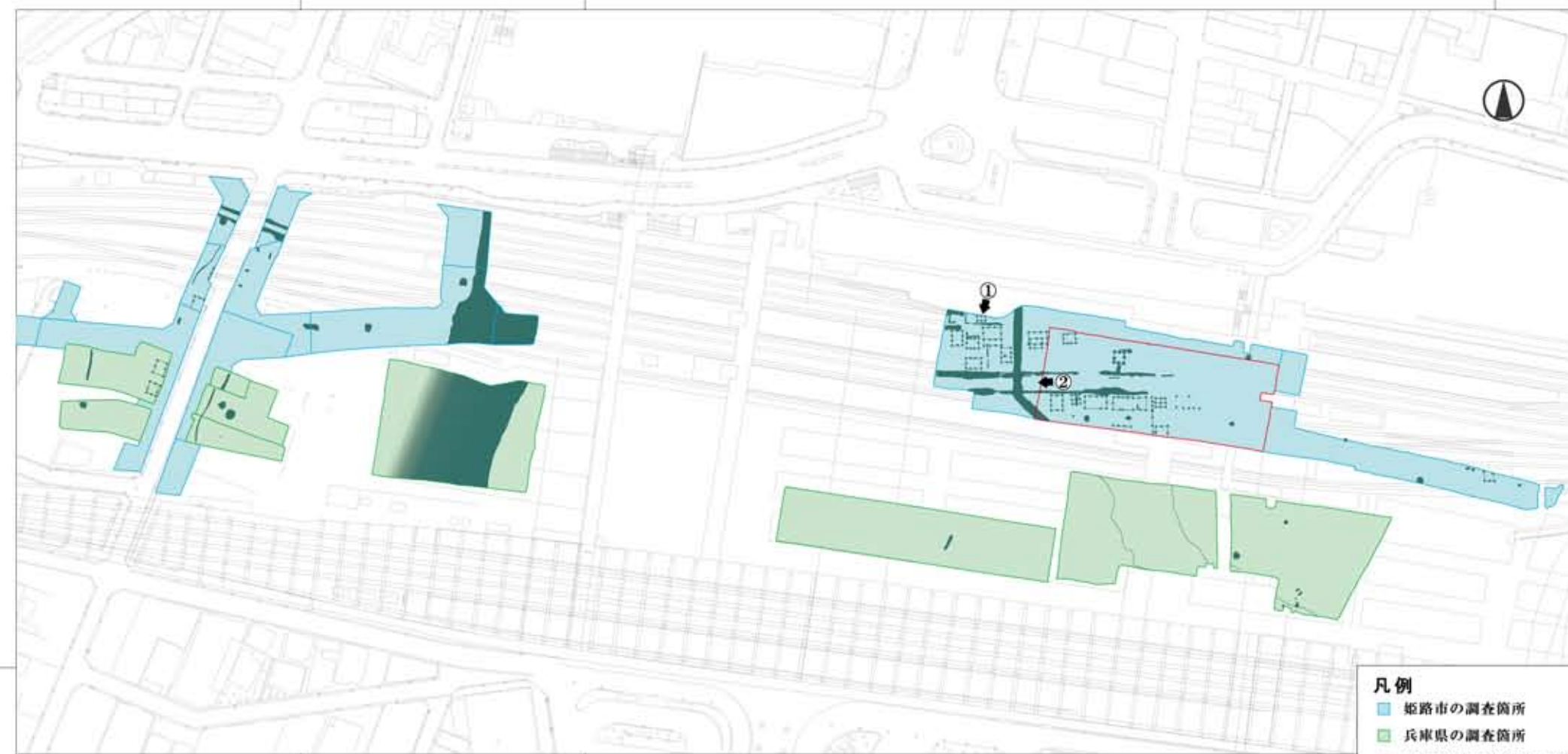
②から見た道路



計量樹の見つかった様子



墨書土器の見つかった様子



奈良時代の遺構平面図 S=1:2,000

- 凡例
- 姫路市の調査箇所
 - 兵庫県調査箇所
 - 裏表紙の空中写真の範囲